日本一の花の生産地から、日本一花を贈るまちに！
愛知県田原市

はじめに

田原市は、愛知県の南東部にある渥美半島に位置しています。北は風光明媚な三河湾、西は伊良湖水道、南には勇壮な太平洋が広がっています。沖合に流れる黒潮の影響で冬でも温暖な気候に恵まれ、日照時間、快晴日数とも全国トップクラスにあることから、「常春（とこはる）の渥美半島」と呼ばれています。

市の北東部は、重要港湾「三河港」を中心とする臨海工業地帯となっており、自動車産業をはじめ多くの優良企業が進出し、活発な生産活動が行われています。

水の恩恵を受けて間もなく50年

大きな河川のない渥美半島は、昔から何度も干ばつの被害をうけてきました。そこで、何とかこの地域に東三河を流れる豊川の水を引こうと、昭和の初めに県議会議員及び国会議員を歴任した　近藤寿市郎氏（現在の田原市高松町出身）が精力的に活動し、昭和43年の豊川用水の全面通水を実現しました。全面通水以降、当初水源として建設された宇連ダム（新城市）に引き続き、大島ダム（新城市）が第二の水源として建設されるとともに、田原市内での土地改良事業等による大規模な生産基盤の整備が進められ、生鮮野菜類の産地化と温室・畜産団地などの造成が行われました。

キャベツの灌水状況

その結果、豊川用水通水後50年で田原市の状況は大きく変わり、今では全国的にも類を見ない農業先進地域となっています。

日本一の農業、キクの名産地

自然環境に恵まれた田原市の農業は、豊川用水の水を最大限に活用し、かんがい設備により、露地栽培、施設園芸や畜産などバラエティ豊かな産地を形成しています。露地栽培では主に、キャベツ、ブロッコリー、スイートコーン、レタス、スイカ、露地メロンなどを作付しており、施設園芸では、キク、カーネーション、バラ、洋花、鉢物などの花き類のほかトマト、メロンが栽培されています。中でも、キャベツ、ブロッコリー、スイートコーン、トマトは愛知県内一の出荷量となっています。畜産についても、乳用牛、肉用牛、豚、採卵鶏、ブロイラー、うずらなどが飼養され、全国屈指の生産量を誇っています。

平成29年に農林水産省から発表された「平成27年市町村別農業産出額（推計）」における田原市の農業産出額は820億円で平成26年に引き続き日本一となりました。

キャベツの収穫風景

市を代表する施設園芸作物にキクがあります。キクの栽培は戦後電照菊の導入と温暖な気候を生かした２～３月の無加温での栽培により、周年栽培が可能になり、徐々に普及してきました。用水の確保、栽培技術や新品種の導入などにより、現在では、年間を通じて計画的に栽培・出荷されています。平成27年産の田原市における輪菊（りんぎく）の出荷本数は328,451千本で、日本一の出荷量を誇っています。「電照菊」の電照風景は、秋の夜長に情趣を添えるものとして、田原市の観光資源の一つとなっています。

電照菊の電照風景

また、欧米で品種改良され、輸入された西洋種のキク「マム」の栽培も盛んです。一本の茎に一輪の花だけを咲かせる輪菊と違い、栽培の途中で蕾を摘み取らず、一本の茎に花を小枝（Spray）状に数輪咲かせることから「スプレーマム」とも呼ばれます。色や花型のバラエティが豊富で用途も様々であり、輪菊に比べて芽かき作業の省略化が図れることと、育成期間が短く、より集約化が可能であることにより、昭和50年代後半から急速に栽培が広まりました。スプレーマムの出荷量は平成27年産で69,853千本となっており、出荷量はこちらも日本一となっています。

輪菊の栽培風景

日本一花を贈るまちに

田原市では「日本一の花の生産地から、日本一花を贈るまちに！」をスローガンに、愛知みなみ農業協同組合、花き生産者および関係者と連携し、様々な取り組みを進めています。市内で花を贈る習慣の定着を目指し、「母の日（５月第２日曜日）」、「いい夫婦の日（11月22日）」、「フラワーバレンタイン（２月14日）」や、誕生日、結婚記念日に「花を贈る日」運動を展開しています。

また、スポーツ大会などの勝者にメダルとともに贈られる「ビクトリーブーケ」に、色や種類が豊富で夏でも花持ちの良いキクを使うことを提案しています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、日本一の花の生産地から、会場を訪れた皆さまに花と幸せをお届けする事を目指しています。

ビクトリーブーケ